

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	佐藤 良太（秋田県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第84号
学位授与の日付	平成27年9月19日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学 位 論 文 題 目	漱石文学における〈近代〉 —科学と宗教の境界—
論 文 審 査 委 員	主査 三谷 憲正（佛教大学教授） 副査 坂井 健 （佛教大学教授） 副査 浅野 洋 （近畿大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

本論文は、夏目漱石における〈近代〉との格闘の軌跡を追求した論考である。具体的には漱石が、西洋的な宗教(ユダヤ・キリスト教的な一神教)、また西洋的な思想(主として科学的な思考)をいかに理解し、またどのように乗り越えていこうとしたのかをたどった論文と言えよう。しかし、佐藤論の追求の方法は、漱石文学のキーワードである語彙に即し、「伝記的事実と創作両面からつぶさに分析・検証する」（「論文要旨」）というところからうかがえるようにきわめて実証的である。漱石における〈近代〉とは、西洋に対置する日本といった対立の構図では読み解けない。それは伝統的な「天道」思想を基層としつつも、西欧的な nature の翻訳語（「天」）の意味をも包み込む東西思想融合の「天」、換言すれば「伝統に根ざした近代」というあり方を模索した点に大きな意義があると論じている。

第一章 夏目漱石における〈近代〉

『京に着ける夕』論 —〈近代以前〉への憧憬—

明治40年3月～4月の京都旅行を素材とする小品「京に着ける夕」は従来事実を描写した「随筆」として理解されてきた。本作に描かれる〈京都〉は極めて「寒く」また「遠い」ところにあり、かつ「昔の儘」であり続ける側面が強調される。明治40年3月28日、漱石は朝東京を発ち、夜京都に着く。しかし当時の記録、例えば、日の気温とを、東京気象台・京都測候所それぞれの記録を調べてみると、むしろ東京の方が寒かったとさえ言える点や博覧会をはじめ文化・産業を推進しつつある〈近代都市〉だった実態などから、その創作性を指摘したものである。（初出は『佛教大学大学院紀要』第37号、平成21年3月）

『坊っちゃん』—〈近代〉へのマニフェスト—

本作は江藤淳らの作品解釈に代表される〈近代〉への〈敗北の物語〉として従来論じられてきた。が、漱石の「中学改良策」（明治25年）や「愚見数則」（明治28年）、また執筆期の「断片」などと本作品を照らし合わせてみると、「〈近代〉的な〈論理〉、合理的な近代精神に対して、敢然と自身のアイデンティティをなす一見古い〈倫理観〉、合理的な思

考では片付かない「義理」や「人情」をもって」、「〈近代〉に戦いを挑んだ」(以上、p. 34) 作品として読むべきではないかという点を強調している論考である。(初出は『愛知文教大学比較文化研究』第 13 号、平成 26 年 11 月)

第二章 漱石作品と同時代

メディアの中の『坊っちゃん』—雑誌教育関連記事を視座として—

『坊っちゃん』が発表された明治 39 年当時は全国各地で〈学校騒動〉が頻発していた時代でもあった。論者は本作を当時の教育関係の記事(『太陽』、『教育時論』、『読売新聞』等)と並置してみることで、両者が密接に共振している事実を明らかにした。本章は「坊っちゃん」が発表当時、「極めてジャーナリスティックな時事小説として豊かに解釈されたであろう」(p. 48)といった点、また「「学校騒動」の戯画として読まれる可能性」(p. 51)などを指摘した好論である。(初出は『佛教大学大学院紀要』第 36 号、平成 20 年 3 月)

第三章 漱石作品と〈神〉

夏目漱石『行人』論 — 一郎の〈救い〉と〈神〉 —

「理知」の力で全てを割り切ろうとする主人公「一郎」は最後には「死ぬか、気が違ふか、夫_(それ)でなければ宗教に入るか」(『行人』「塵勞」三十九)という袋小路に追い詰められる。その姿を当時の自然主義文学(例えば島村抱月などの評論)に表象される、近代を生きる知識人のメタファー(喩)として読み替えられ可能性を指摘。「西欧形而上学そのものの枠組みを相対化する人物」(p. 67)として「一郎」をとらえている点に新見がうかがえる。(初出は『キリスト教文藝』第 29 輯、平成 25 年 7 月)

夏目漱石『こころ』— 描かれた〈五倫〉と荀子〈性悪説〉 —

明治とともに歩んできた近代知識人の一人である「先生」の言う「一時代前の倫理」とは、前近代の封建的な道徳(朱子学的儒教倫理)に重ね合わすことができる。それを〈五倫〉(君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友)とすれば、「先生」と「K」を巡る亀裂には前近代の道徳と明治という新時代のそれとの相克が考えられる。「先生」の孤独の背景には中国古典の荀子の言う〈性悪説〉(とりわけ、巻十五「解蔽篇」、巻十七「性悪篇」)からの眼差しが読み取れる点を指摘した。(初出は『愛知文教大学論叢』第 17 号、平成 26 年 11 月)

第四章 漱石文学における〈罪〉と〈天〉

夏目漱石における〈罪〉—漱石的〈罪〉と天道思想—

初期の『吾輩は猫である』(明治 38 年)から最晩年の『明暗』(大正 5 年)に至るまでの全作品には 95 例に及ぶ〈罪〉が使われている。これらを丁寧に検証してみると、漱石の〈罪〉なる概念が従来言われていた宗教的(特にキリスト教)な「原罪(Sin)」とは異なることを明らかにした。漱石文学に描かれる〈罪〉とは一神教的な罪障観とは違い、むしろ「〈天〉という不可視の機構の中で認識される〈罪〉」(p. 98)、「三世(過去・現在・未来)の輪廻の中で認識される罪」(p. 99)だったのではないかと、この結論を導く論考である。(初出は『阪神近代文学研究』第 11 号、平成 22 年 5 月)

夏目漱石における〈天〉—止揚される近代的自我—

前章に続き、「則天去私」へとつながる、漱石における〈天〉という重要なキーワードに着目したもの。全作品中、〈天〉は 106 例見いだすことができる。それらを通観してみる

と、伝統的な意味を基層としつつ、一方では西欧語 nature の訳語としての「自然」「天」の意味内容をも含む〈天〉であることを指摘し、そこから「〈伝統〉と〈近代〉を一つの言葉に凝結させ、伝統と近代の相克の先に、〈近代〉への反措定とさらにその超克をも示唆している」(p. 116)概念だったのではないかと位置づけている。(初出は『阪神近代文学研究』第12号、平成23年5月)

〔2〕審査結果の要旨

以上述べてきたように本論文は、漱石が明治日本の〈近代〉といかに向き合ってきたのかについて追求を重ねてきたものである。その考究は常に実証的であり、方法として説得力がある。例えば、冒頭の「『京に着ける夕』論—〈近代以前〉への憧憬」などは、東京の中央気象台の「空気ノ温度」(1907[明40]年3月27～31日)の資料を博搜し、他方では京都測候所の「AIR TEMPERATURE」(1907年3月27～31日)と並置させ、「東京 5・2℃」「京都 6・0℃」を掲出。「むしろ東京の方が寒いとさえいえる」(p. 7)点を明らかにした。「〈京都〉をして肉体的にも精神的にも「寒い」所としなければならなかった意識的な改変がみてとれる」(p. 7)と指摘。また漱石がやってきた明治40年の当時の京都は交通、産業、文教、どれを取っても、作品の記述とは異なる近代的な都市であった実態を意図的に変容させている点を各資料によって提示し、「『京に着ける夕』内部に表象された〈京都〉と、外部に存在する実際上の「京都」の大きな差異」を見いだしている。このような点から「非合理・情動の座としての〈近代以前〉への憧憬」をこめた作品という新たな位置づけを行っているところに新見がある。

「科学」ということに関しては特に「夏目漱石『行人』論—一郎の〈救い〉と〈神〉—」(第三章)に詳しい。自然主義を標榜する島村抱月の評論「序に代へて 人生観上の自然主義を論ず」の中で説かれている科学的な認識の優位性を、漱石『行人』の主人公「一郎」の思考形態と重ねて読むという試みを行っている。西欧近代を特徴づける「科学的認識」・「理智」をどこまでも追い求めると、それは結局のところ、個人が孤立する地平に立たざるをえない。その極限において悩む「一郎」とは実は「現実の科学的・客観的観察をめざす西欧のナチュラリズム理論を内在化させた当代日本の自然主義への明確な反措定」(p. 63)として造形されているのではないかと、という主張は清新な見解である。

また漱石文学と〈宗教〉性との関わりは〈近代〉を考える上で、重要な要素を含んでいると思われる。その点を追求したのが「夏目漱石における〈罪〉—漱石的〈罪〉と天道思想—」(第四章)である。概要でも述べたように小品文を含む漱石全32作品に表れた95例の〈罪〉を丹念にたどった労作である。これまでキリスト教的な「原罪(Original Sin)」をその中に見ている論が大勢を占める中、「漱石の作品において「原罪」という文言はみられない」(p. 84)と明確に否定し、『聖書』からの引用は『三四郎』の終幕にある「詩篇第五十一篇」からの一例のみであると明言し、その上で「〈罪〉及びその関連語は、多く恋愛や結婚といった男女の相関の中で表れている」(p. 90)点を指摘している。結局のところ「漱石における〈恋愛〉は、その〈罪〉を前景化させる媒体として機能」(p. 98)しているのであり、「〈天〉の法則・秩序の下で認識される、因果律的な〈罪業〉認識である」(「天」に関しては「論文の概要」参照)という見解は、従来見られることのなかった点であろう。(ちなみに本稿は平成23年度の「佛教大学 学術奨励賞」を受賞)

とはいえ、いくつか問題がないわけではない。例えば、口頭試問において評価の高かった「『京に着ける夕』論 ―〈近代以前〉への憧憬―」（第一章）にしても、作中重要な位置を占める「子規の居ない京都」という側面に触れていない点などである。また「メディアの中の『坊っちゃん』―雑誌教育関連記事を視座として―」（第二章）などは先行研究としてあげられている小埜裕二氏の「『坊っちゃん』小考 ―明治三十八年の学校騒動―」の指摘をどこまで継承し、どこからが独自の論考なのか、がやや不分明であり、その点ははっきりと線引きをしておくべきであろう。こうした点は「夏目漱石『こころ』―描かれた〈五倫〉と荀子〈性悪説〉―」にも見られる。先行研究と重なる部分が少なくないので、その境を（煩瑣ではあるが）明確にしていく作業が求められよう。

また大きな文脈でいえば、漱石と〈近代〉とは、その問題設定の枠組み自体がやや手垢にまみれたテーマであり、その論述内容や分析手法にしかるべき独創性が見られるものの、今後さらに検討の余地はあろう。あるいはまた、漱石的な恋愛にまつわる〈罪〉が共同体の道德規範からの逸脱に求められるとすれば(p. 91)、アモラル(amoral)な現代では漱石文学の〈罪〉は無効化することになるのかどうか。こうした疑問も自ずと起こってくる。（ちなみに、論文目次には頁の記載ありたし）。

このような点に多少の疑義は見られるものの、総体的にみれば本論文はこれまで当然のように受容されてきた漱石文学の読みに新たな展開を迫る問題提起を数多く含んでおり、その点は高く評価されなければならない。佐藤論文によって明らかにされた成果は、今後の漱石研究にとって新たな展開を促す着実な布石であることは確実である。以上の点から、本論文は「博士(文学)」の学位に価する請求論文であると認められる。

(以上)